

天皇皇后両陛下のラトヴィア訪問



ラトヴィア・リーガ市在住

黒澤 歩

こんにちは！私たちはラトヴィア大学アジア学科を代表してラトヴィアの国の歴史についてお話ししたいと思います。民族の心がどう変わったのかを、詩を用いて表現したいと思います。まず、古い子守唄を歌いますのでお聞きください。

揺り籠よ 揺れよ
坊やがすこやかに育つよう

主人は兵士を待ち望んでいる
父と母は畑の耕し手を待ち望んでいる

この子守唄は、両親が心配する心を歌っています。昔、戦争が多かった時代に、ラトヴィア人の農民は戦に駆りだされました。そのため、若者の母親は悲しみました。息子が戦場で死んでしまったら、誰がこの家を守っていくのか、と悩みました。当時、人々は家族のことだけを心配しましたが、今では人々は民族全体のことでも考えるようになりました。ラトヴィアの歴史は辛い時代がありましたが、ラトヴィア民族は今、誇りと幸福を感じています。

次は現代詩です。この詩にはラトヴィア民族と自然の関係がよく表れています。前述の子守唄に比べて、ここでは喜びの気持ちがよく見られます。「白樺」という詩です。

師 天皇皇后両陛下をお迎えした日本学コースの学生たちと邦人講師



我が大地の良き暮らし
他にどこにあるだろう
山を越えてやってきたのは
木皮の長靴を履いた白樺だ
堂々と誇り高く
胸を高く張っている
白樺がこんなに白いとは
ほかに比べようもない誇らしさ
すると我も誇りを持つ
いずこも誇りに満ち溢れている
のはなぜか。

「お前のお陰さ」と言う白樺に
我は答える「貴方のお陰です」

自分のことを誇りとする白樺の気持ちが人々にも影響を与えます。民族と自然は互いに欠かせない存在なのです。白樺は独立を回復したラトヴィアを象徴しています。辛い時代も良き時代も含め、歴史があってこそ現在の私たちがあります。過去を忘れず、私たちは誇りを持って将来に向かっていきたいと思っています。

5月25日、30度を超すような炎天下の快晴の日、ラトヴィア大学

をご訪問した天皇皇后両陛下に、日本学コースの二人の学生代表（男女それぞれ20歳）が日本語でこのような発表をしました。二カ月前から多くの学生たちのアイデアを募って準備してきた発表の内容が、今次ご訪問にてラトヴィアの歴史に触れた天皇陛下のお話と偶然にもよく呼応したものとなりました。

ラトヴィアご滞在はほんの一日ではありましたが、メディアはこぞって日本に強い関心を示し、ラトヴィアにおける日本が脚光を浴びた一瞬でした。大統領夫妻とのご歓談、自由の記念碑への献花と沿道に集まった市民や在留邦人との交流、午餐会に引き続き占領博物館の見学という、一連の外国要人を迎えるラトヴィア側プログラムに組み込まれた日本研究者・日本語学習者との交流でした。大学生が日本語を初めて実践で使った相手が天皇皇后とは、まったくこれ以上の刺激があるでしょうか。日は過ぎて、ラトヴィアでは大統領が変わります。